

☆簡易懸濁法について☆

簡易懸濁法とは、**錠剤粉碎やカプセル開封をせずに錠剤・カプセルをそのまま温湯(55℃)に入れ崩壊・懸濁させて経管投与することです。**

メリット

- 直前まで剤形を保持できる
- 安定性が損なわれにくい
- 薬品ロスを生じにくい
- 薬に曝露されにくい
- 調剤業務が効率的
- 中止・変更の対応が可能

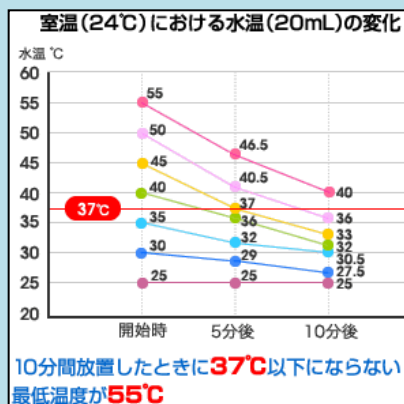
簡易懸濁法が確立されるまでは全て粉碎し調剤していたため、**薬品ロスや調剤者の曝露**が問題となっていました



なぜ55℃、10分？

カプセルを溶かすためです。カプセルは、37℃±2℃の水で10分以内に溶けると日本薬局方で規定されています。しかし、実務上37℃の温度を保持することは困難なので、10分間放置しても37℃以下にならない最低温度の55℃の温湯を使用します。

ポットのお湯：水＝2：1で作ると約55℃となります。安定性の観点から、10分以上は放置しないよう注意が必要です。



注意点

簡易懸濁不可のものや、水で溶かす薬剤、配合変化を起こしやすい薬剤があります。

★徐放製剤(ニフェジピンCR錠など)：過度な薬効が現れてしまう

★水で懸濁する薬剤(ランソプラゾールOD錠など)：

可塑剤のマクロゴール6000がお湯で溶かすと固まりができチューブが詰まる

★配合変化を起こしやすい薬(塩化ナトリウム、酸化マグネシウム、マグミットなど)：

Naイオン、Mgイオンの関係で他の薬剤の懸濁性に影響がある

→他の薬剤を投与後、フラッシュしてから投与する

※当院ではリマインダーを薬袋に添付して注意喚起を行っています

他の薬剤をフラッシュしてから投与！！
塩化ナトリウム末(NaCl)
他の薬剤の懸濁性を低下させる

他の薬剤をフラッシュしてから投与！！
マグミット錠330mg
他の薬剤の懸濁性を低下させる

常温(15-25℃)の水で懸濁

※一部、薬のコーティングを砕いてから簡易懸濁するものもあります。(薬剤部より木槌を貸出しています)



この薬、簡易懸濁できる？と思ったら薬剤部までお問い合わせください。

